

## 近世信濃の窯業史研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小松, 隆史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/2845">http://hdl.handle.net/2297/2845</a>

# 金 大 考 古

第 3 5 号

---

## 近世信濃の窯業史研究

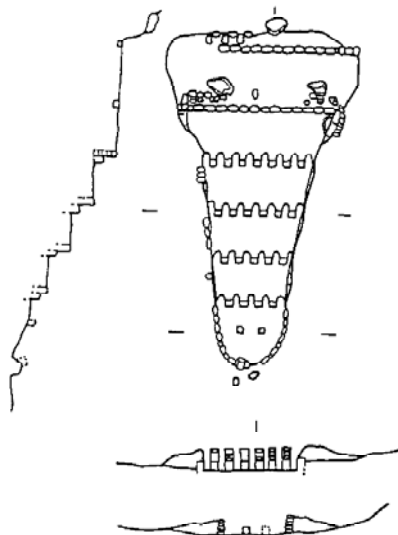
小松 隆史

近世の信濃はほぼ現在の長野県に相当し、狭小な盆地を中心とする地域ごとに小藩や知行地が分立していた。

この信濃に開かれた窯は、一般に日常雑器を生産していたとされる。開窯の理由と背景

として、「陶磁器は重く、壊れやすいため、運搬に大変な労力と駄賃を必要とする。そこで、その地域で消費する陶磁器を生産すべく窯を開いた。」という、「地域内流通」が主要因であったとする見方が強かった。信濃の窯業は、窯跡の発掘調査のみならず、消費遺跡の調査の中でも認識されるようになってきているが、十分に検討されているとはいえない。本稿では、このような近世信濃の窯業について全体を概観し、その成立から発展の歴史をまとめることに主眼をおいた。

窯の操業について記された歴史資料、発掘調査報告書をはじめとする文献などをもとに検討できた33窯の開窯理由には、藩が主体となるケースと個人的な経済事情によるものがある。その多くが、瀬戸・美濃から陶工を招いたり技術指導を受けるなど、直接的・間接的技術伝播があったことが資料よりわかる。



藤沢窯跡（長野県高山村）

また、発掘調査された窯のうち16窯については窯構造も知ることができ、瀬戸・美濃の技術が導入されていることが指摘された。基本的な窯構造が同じであることは、焼成技術についても影響を受けていたことを示しているといえよう。これは文献から知られる陶工や技術の系譜と矛盾しない。

製品については「大型の日常雑器が生産の主体」とまとめられてきたが、地域によっては天目茶碗・丸碗などの碗類、小皿類が生産されていることが確認できた。造形・施釉技法も瀬戸・美濃の影響を受けているものがほとんどであり、資料、窯構造にみる瀬戸・美

濃の技術導入は、製品からも確認できる。さらに、いくつかの窯で改良された技術が地域内外に広がっているため、近接する窯で共通性が見られた。

陶工の移動や技術の伝播によって共通性を持つ製品はその識別が難しく、消費遺跡で細片となって出土するにいたっては「在地産」として扱わざるをえない状況におちいる。そこで、窯出土資料を薄片資料とし、偏光顕微鏡観察によってその胎土や成形技術についてより詳細な情報を引き出すことを試みた。これにより、製品の素地の違い、成形技術の違いがある可能性も指摘された。

開窯の理由と背景にあった「地域内流通」の実体をとらえるため、消費遺跡で出土した陶磁器の状況を検討した。ここから、製品の地域内への流通とともに、地域外への流通も明らかになった。さらに、資料や製品の銘などから、中馬など街道を利用した製品の移動、製品の販売先など、陶磁器流通の状況の一端をうかがうことが出来た。

以上のことから、近世信濃諸窯の多くは瀬戸・美濃系の技術導入によって江戸時代後期に開かれ、地域によって様々な発展の経過をたどったが、その背後には、中馬に代表される流通機構の発展、貨幣経済の浸透など当時の時代背景があることが指摘された。生産者は陶磁器を「商品」として認識し、「地域内」で消費するためだけではなく、商品として他地域へ流通させることを意識して窯を開き、生産・販売していたと考えられ、これが信濃諸窯の発展に大きく影響した要因であったといえる。